

## 女性ジャーナリストの死

内戦状態が続いているシリア北部アレッポで、ジャーナリストの山本美香さんが、8月20日、政府側の民兵による銃撃に遭い亡くなりました。

山本さんは、ジャパンプレス所属のジャーナリストとしてイラク戦争など世界の紛争地を中心に取材し、2003年にはボーン・上田記念国際記者賞特別賞などを受賞しています。

また、山本さんは、戦場を駆け巡るだけではなく、早稲田大学大学院や母校の都留文科大学で講師とし教壇に立ち、若い学生たちに世界の紛争の現状や、それを伝えるジャーナリズムの役割と責任について語っています。

シリアでは既に多くのジャーナリストが殺害されています。彼女の死に関しても様々な情報が流れていますが、山本さんと行動を共にしていた佐藤さんの撮った映像には、通りを歩いていた男が山本さんらを指差しながら民兵に「ヤバーニ（日本人だ）」と叫ぶ姿が写っていますので、彼らは、山本さんを日本人ジャーナリストと知っていて狙い撃ちした可能性もあります。

今回の山本さんの殺害について、藤村内閣官房長官は記者会見の中で、極めて遺憾であり、「かかる行為を強く非難する」と語っていますし、ユネスコのボコバ事務局長も声明を発して、殺害を強く非難すると共に「ジャーナリストを標的にしてはならないという義務を尊重するよう」全ての内戦当事者に改めて求めています（8月21日付朝日新聞）。

今回の事件は、山本さんにとっては余りにも理不尽であり、ジャーナリストとしての道を突然塞がれてしまった彼女の気持ちを思うと、やり切れなさが残ります。しかし同時に、彼女は、自分の死に対して悔いてはいないようにも感じています。

山本さんは、常に死と隣り合わせの現場におり、そこから逃げようとはして来ませんでした。そして彼女は、銃撃戦に巻き込まれながらもカメラを回し続け、自身が銃弾を浴びてしまいます。

死の直前まで撮り続けた映像を見て、ジャーナリストとしての山本さんの凄さを改めて実感するしかありませんが、そこまでして取材をし続けようとする彼女の強さ、そこまで彼女を突き動かしているものは何なのでしょう。

それは、山本さんが撮影した最後の映像から伝わって来ます。彼女は、子どもや女性など、紛争に巻き込まれ、悲惨な状況に置かれている名もなく弱い人々の、ありのままの姿を伝える事が世界を変える力になると信じていたからではないのでしょうか。

世界で最も有名な戦場カメラマンだったローバート・キャパの「ちょっとピンぼけ」という本の中に、こういうシーンが描かれていた事を思い出します。

ドイツ軍を攻撃して戻ってきた爆撃機は、出撃した時は24機だったのですが帰還したのは17機で、かなり被害を受けています。乗員の中には既に死んでいる者もいます。キャパは最後に降り立ったパイロットを撮ろうとした時、そのパイロットは「写真屋！ どんな気で写真がとれるんだ！」と叫びます。

キャパは自分の仕事に対して、こんな仕事は葬儀屋の仕事だとすっかり落ち込むのですが、一晩寝込んだ後、「怪我したり、殺されたりしている場面抜きで、ただのんびりと飛行場のまわりに坐っているだけの写真では、人々に、真実と隔たった印象を与えるだろう。死んだり、傷ついたりした場面こそ、戦争の真実を人々に訴えるものである。だから、私が湿っぽい気持ちにならないうちに、1本取り終えたことは、やはりよかった」と思い至ります。そのキャパも、1954年、ベトナムでベトコンの仕掛けた地雷に触れて亡くなっています。彼もまた、戦場カメラマンとして戦場で亡くなったのでした。

彼女が今年の5月に早稲田大学の学生に語った言葉が、若者たちへの最後のメッセージとなりました。

日本で暮らす私たちにとって戦争は遠い国の出来事と思うでしょう。しかし、世界のどこかで無辜の市民が命を落とし、経済的なことも含め危機に瀕している。その存在を知れば知るほど、どうしたら彼らの苦しみを軽減することができるのか、何か解決策はないだろうかと考えます。

紛争の現場で何が起きているのか伝えることで、その国の状況が、世界が少しでも良くなればいい。報道することで社会を変えることができる、私はそれを信じています。

(中略)

たとえば世界の安全は日本の安全につながります。人道的な見地からも目をそらしてはいけない大切なことがたくさんあるはず。「仕方がないこと」「直接関係がないこと」と排除してしまうのでは、ジャーナリズムの役目を果たしているとはいえません。

(中略)

社会にはさまざまな考え、職業、立場の人たちがいます。メディアの世界に身を置くと、力を持っていると勘違いしてしまうことがあります。高みから物事を見るのではなく、思いやりのある、優しい人になってください。

山本さんの死が世界に与えた影響は、非常に大きいと思います。今、シリアで何が起きているか、彼女は、その身で日本人に向かって明確に知らせたといえます。志に生き、信念を貫いた山本さんのご冥福を、心から祈ります。(塾頭 吉田 洋一)